原　口　忠次郎（はらぐち　ちゅうじろう）

江　口　正　秋
（神戸市港湾局技術部長）

原口は，明治22年11月，佐賀県に生まれた。大正５年，京都帝国大学土木工学科を卒業すると内務省に入り，荒川改修工事に従事，昭和８年には満州国に出向して道路建設にも携わった。

昭和14年に帰国して神戸土木出張所長に就任，前年の阪神大水害で大きな被害を受けた神戸の水害復興計画を推進した。これが原口と神戸の最初の出会いである。

昭和20年11月，退官して岡山県に疎開していた原口は，中井一夫市長の招請を受け戦災復興本部長として神戸市に赴任，１年後助役となって復興事業を手がける。神戸との２度目の出会いである。

その後，昭和22年に実施された初の神戸市長選挙に立候補して惜敗するが，第１回参議院選挙では最高位で当選する。そして，２年半後の24年11月，小寺市長急逝後の市長選挙に立候補，当選して第12代神戸市長となり，以後５期20年にわたって国際都市神戸の発展に力を尽くすことになる。

就任当初は，財政悪化に悩まされた時期もあったが，都市計画の面でも数々の施策を打ち出した。先ず，延長587キロメートルの都市計画街路の計画を実施するとともに，隣接市町と結ぶ主要地方道60キロメートルを改良整備した。さらに，北神地域と市街地を結ぶ六甲トンネル，神戸港に直結する阪神高速道路神戸１号線，「レール貸し」で四私鉄をひとつにつなぐ神戸高速鉄道など交通体系を整備，確立した。また，神戸市下水道計画の立案，実施も行った。市街地改造事業についても，長田大橋地区において全国初の事業を完成させ，わが国の都市再開発事業に先鞭をつけた。

一方，神戸発展の要である港の近代化にも力を注ぎ，海運界のコンテナ化を予見して摩耶埠頭にいちはやくコンテナ船埠頭を建設したのをはじめ，ポートアイランドに本格的なコンテナ船埠頭を作り，神戸港を世界有数の国際貿易港とした。また，背山を削った土砂で埋め立てを行い，港湾施設を拡大するとともに，跡地にニュータウンを建設する公共ディベロッパー方式を開始した。「山海へ行く」と表現されたこの方法はポートアイランドの海上文化都市を実現させ，今も六甲アイランドやポートアイランド２期の造成に引き継がれている。

一方，原口は教育に非常に熱心な一面があった。市立産業技術学院や市立六甲工業高等専門学校を設立したほか，私費を投じて原口育英会を設けている。

市長退任後，原口はその功績を称えられ勲一等瑞宝章を授与され，初の神戸市名誉市民にもなったが，昭和51年３月，86歳で没した。

今，「技術に生きた」原口は，自らが提唱した明石海峡大橋の架橋地点を見下す舞子の丘に静かに眠っている。